



# 妖怪物怪



川崎ゆきお

妖怪博士付きの編集者が、いつものように訪問している。今日も特に用事はないようだ。

「先生の好きな妖怪はいますか」

「物怪かな」

「もののけですか？ 物怪って、妖怪と同じようなものでしょ」

「まあな」

「物怪って、いう妖怪がいるのですか。妖怪名が物怪なんですわね」

「そうじゃ」

「どんな妖怪ですか？」

「何でもない小男で、そうだなあ中年かな。若くはない。しかし、うんと年寄りかもしれん。何せ妖怪なので、何百年も生きておる。しかし、歳月を経ても風貌は変わらんようだ」

「どんな感じの妖怪ですか」

「髪の毛は短いが、禿げてはおらん。丸坊主ではなく、五分刈り程度かな。その毛の長さは揃っておらん。短いもあるし、長いもある。これは人間の手で作れる髪型ではない。そして、目はぎょろりとしておる。鯛の目のようにな。形はいい」

「別の話をしてもいいですか」

「どうした」

「いや、イメージが湧かないので」

「だから、際立った形状の妖怪ではない。退屈な奴だ」

「聞く側も退屈しそうな妖怪なんですわね」

「そうじゃ」

「その妖怪、何をしていますのですか」

「着ているものは、野良着だ。シャツとズボンではなく、着物だ。旅人の扮装ではない。その辺りの畑で野良仕事でもしておりそうな格好じゃ」

「野良仕事の妖怪なんですわね」

「そうじゃない。出没場所は原っぱじゃ。田畑ではない。里近くでもない。淋しい山野かな。しかし、高い山じゃない。村と村を結び村道脇の草むらなどが、出没場所じゃ」

「じゃ、山仕事の人のような」

「猟師でもないし木樵でもない」

「出没する理由は何でしょうか」

「分からん」

「はい」

「ぽつんとそこに立っておる」

「案山子のようなものですわね」

「しかし、足があるので、歩ける。移動はするが、大概はじっとしておる」

「特徴がないのですわね」

「見た目も妖怪とは思えん」

「それで、何をします妖怪なんですわね」

「そうだな」

「どうかしましたか」

「話していて眠うなってきた」

「あ、僕もです」

「まあいい、ここまで語ったのだから、続ける」

「先生、無理をしないで」

「我慢する。眠い妖怪じゃ」

妖怪博士の瞼は完全に落ちている。「ただ、そこにおるだけの妖怪かな」

「やはり眠いです。先生」

「これが何ともいえんほど、わしは好きなんじゃ」

「好き嫌いを判断するような特徴がないのですが」

「その妖怪と出合った旅人の記録がある」

「どんなエピソードでしょうか」

「あなたは誰かと聞く。私は物怪だと答える」

「まさか、そこで終わりなんじゃないでしょうねえ」

「物怪が語るには、昔はさる貴族に愛されていたらしい。都の公家さんだろう。そこで居候をしていたころが全盛期だったらしい。妖怪なので客人ではない。居候と言っても部屋が与えられたわけではない。庭に住み着いておったらしい。昔は裸だったようでな、全身まばらな毛で覆われておった。髪の毛と同じように長い毛や短い毛が混ざり合ったような、妙な体毛だ。見るからにバケモノだ。獣そのもの。しかし、そんな獣はおらん。だから、妖怪なんじゃ。その貴族はその動物のようなものを愛したようだ。これはペットのようなものかな。犬や猿との違いは人語を話せたことだ。この貴族が詠った歌が万葉集の中にもあるらしい。それをこの妖怪は未だにそれを懐かしんでおるようじゃ」

「先生、もう眠いからいいです」

「そうか、わしもじゃ」

了